

# ベネデット・ヴァルキ『美とグラツィアについての書』 (1550年頃)、訳と註釈

足 達 薫

ベネデット・ヴァルキ『美とグラツィアについての書』(1)

この上なく気高く高名なレオーネ・オルシーノ閣下、またの名をフレッジュ大司教閣下へ(2)  
ベネデット・ヴァルキ

先に、偉大な貴殿は二つの問いをわたしに課されました。最初の問いは、グラツィア [grazia] は美 [bellezza] なしにありうるかどうか、第二の問いは、それら二つ、つまり美とグラツィアのどちらを自らに望むべきか、というものでした。最初の問いはこの上なく難しいものであり、わたしは何の準備もしていなかったこともあり、それについて語る勇気はありませんでした。そのため、愛をめぐるさまざまな困難について論じた書の中で述べておいたいくつかの点を挙げたり(3)、さらにカトゥルススのきわめて有名なエピグラムを [トスカーナ語へ] 翻訳するにとどめました。

クィンティアは、多くの者にとって優れた形姿をしており [formosa]、わたしにとっても彼女は純粋で、背が高く、調和している [recta] ……

Quintia formosa est multis, mihi candida, longa, recta est... (4)

あの博識この上ないミランドラ伯爵ピコモこの問いについて考えたようであり、[ジローラモ・ベニヴィエーニの『愛をめぐるカンツォーネ』の]『註釈』(Commento) 第三書における七スタンツァについての解説において、彼自身の翻訳をおこなっております(5)。このたび、先の問いについて述べたいと思いますが、これは貴殿を満足させることができると確信したからではなく、貴殿に喜んでもらいたいという一心からですので、その点をお忘れなきようおねがいたします。さて、第一の問いを解決するには、美とは何か、グラツィアとは何か、を知ることが必要不可欠です。それらを知る最良の方法、そして最も得心できる確実な方法は、それぞれについての定義を比較すること、これ以外にありません。貴殿が解明を望んでいらっしゃるのは、本性 [自然] によって形成された身体の美 [la bellezza naturale corporale] に限るならば(「本性によって」と呼ぶのは、神的 [divina] に形成された身体の美と対置し、さらに技 [arte] によって形成された身体の美とも対置するためです)(6)、美とは、それを見る者および認識する者の靈魂 [anima] を悦ばせる [diletta] 何かであり、ある種のグラツィア [una certa grazia] にほかなりません(7)。それは靈魂を悦ば

せ、その物と一体化したいという欲望を靈魂に喚起します。つまり（一語で語るならば）愛すること [amarla] へと靈魂を誘導します（8）。これに対して、グラツィアは、グラツィアをもつ [graziose] なんらかの事物から、あるいはグラツィアを与えられた [graziate] なんらかの事物から発生したり、あるいはその内部に含まれていたりする、ある種の特質 [una certa qualità] です。

これらの定義から引きだされるのは、美があるところにはグラツィアがなければならないこと、そしてその逆に、グラツィアがあるところに必ず美があるとはかぎらないということです。これはちょうど、人間である以上は必ず動物でなければならないが、その逆は正しくないという事実と似ています。このように捉えるならば第一の問いは解決され、次のように説明されるでしょう。グラツィアは美なくしてもありえますし、あり続けることができます。なお俗語ではグラツィアの別称がありますが、それについてはのちに説明しましょう。これに対して美、もちろんここでわたしが想定しているのは真の美 [vera bellezza] ですが、そちらはグラツィアなしにはありえません。この第一の問いへの答えから、第二の問いへの答えがおのずと導かれます。美の中にグラツィアが必然的に見いだされるのですから、美を求めずにグラツィアのみを求めるいかなる理由があるでしょうか [そんな理由はありません]。もしグラツィアのないなんらかの美が見いだされたとしても、わたしは自分が美しくあること [bello] よりも、グラツィアを与えられること [graziato] を望むでしょう。グラツィアがなくとも美はありえると考えた人たちがおりますが、わたしの考えでは、彼らすべてが、わたしと同じように [グラツィアを] 望むにちがひありません。彼らの大多数が語るところによれば、美とは、あらゆる部位の間の正しい比例および対応関係だそうす。彼らは、美は正しい量的特性 [quantità] と各部位の適切な質的特性 [qualità] において成立するものであり、それらの特性自体でもある、と考えます。さらに、彼らは、そうした特性に、色彩の柔らかさ [dolcezza] や滑らかさ [soavità] を加えることもあります。この説に味方をしたひとりが偉大な哲学者アリストテレスであり、彼は、『トピカ』第三書、『修辞学』さらに『倫理学』において、大きくない女性を美しい [bella] と認めていません（9）。しかし、このような安易に構想された説 [美は量的・質的特性であり、比例性にあるとする説] が、経験と感覚双方に反していることに疑問の余地はありません。なぜならば、あのピコもまた述べていたように、われわれは一日の中で、量的性質においても質的性質においてもきわめて優れた比例をもつ、姿態の優れた女性たちに数多く出会いますが、彼女たちすべてを美しい [bella] と呼ぶことはできないからです。仮に美しいと呼べる場合でさえ、彼女たちには、われわれを悦ばせる [ci diletta] 何か、あらゆる事物を超える [muove sopra ogni cosa] 何か、つまりグラツィアを与えられて [graziate] ありません。事実、われわれ [男] が多く心を奪われるのは、グラツィアを与えられた [graziata] 女性です。それらの女性は、先に挙げた諸条件すべてを満たしているにもかかわらず、われわれがグラツィアと呼び、ラテン人たちがウェヌスタ [venustà] あるいは時にはウェネレ [venere] と呼んだこの特質のみは完全に欠く女性に比べた場合、姿形においても色においてもはるかに優れた比例をもつように感じられます [nella figura e ne'colori potesse esser assai meglio proporzionata]。先に挙げた人々が信じているように、もし美が各部位間の比例と尺度によって成立するとすれば、一人の顔には常に同一の比例と色があるのですから、それにもかかわらず同じ人の顔が時には美しく [bello] に見えるの

に、他の場合にはそうではないという事態は起こらないはずですが、述べるまでもないことですが、  
靈魂の領域に属するあらゆる単純な事物は、どれひとつとして身体も部分ももっていないのですから、  
プラトン主義者たちが述べるとおり、美しいはずがありません。したがって、学知 [scienze]、  
美德、詩文、散文、靈魂、知性、神そのものは、日常的には美しいと語られますが、実際には美しいと語られるべきではありません。

最初の目的に立ち戻れば、グラツィアをもたない [non abbia grazia] 事物は、たとえそれが大きくて、優れた比例をもち、適切な色彩をもっていたとしても、わたしの考えによれば、真の意味において美しいと呼ぶことはできません。先に触れたこの上なく流暢な [leggiadrissima] エピグラム、すなわち以前わたしたちが試みに訳し註釈を加えたあのエピグラムにおいて、カトゥルスが述べようとしたのは、わたしの考えではまさしくこのことです。あの註釈をいまいちど思いだすことができれば(わたしにはできません)、貴殿の疑問と願いは、さらに完全に満たされたでしょう。他方、あの訳文のほうはわたしの記憶の中に残っておりますので、そのまま書き起こして、喜んで貴殿にお伝えいたします。この訳文はピコの訳とは異なるところがあるかもしれません。彼は二行分を訳さずに省略しています。彼にとって、その二行はあまり好ましくなく、不必要に思えたのでしょう。わたしは、あの偉大な才能の持主を批判するためではなく、彼のすばらしい判断力を模倣すると同時に、いかなる些細な事柄においてもこの完全な教師から学ぶつもりで、エピグラム全体をこう訳しなおしました。

クインティアは多くの人の眼にとって美しく [bella] 映り、わたしの眼にとっても彼女は白く、大きく、伸びやかで、よい形に映り、それどころかどの部位にも欠けるところがない。

それなのに彼女は完全に美しく [bello] はない。

彼女にはグラツィア [grazia = カトゥルスのテキストではvenusutas] が微塵もないから、彼女を悦ばしい何かへと変える塩ひとつまみが欠けているから。

レスビアは美しく、完全に美しく、彼女のみが

他のあらゆる女から、あらゆるグラツィアを盗み取った。

貴殿閣下よ。詩人の歌はこのとおりです。彼女の中で、質的特性は色であり、「白い」とされています。量的特性は「大きい」、そしてあらゆる部位が適切に配置されていると述べられています。しかし、それにもかかわらず彼女は美しくないとされます。なぜならば、他者の靈魂に喜びをもたらし、それを惹きつけるグラツィアをもたないからです。しかし、ここでひとつの疑問が当然のように生まれます。われわれが論じているこのグラツィアという特質が、いったいどこから生まれるのでしょうか。多くの人たちは、適切な色を与えられた各部位の尺度と比例からだと信じていますが、そうでないことには疑問の余地がありません。そのことが疑いようのない真実だということは、これまで挙げてきたいくつかの理由に加えて、技によって描かれた身体 [corpi artificiali] の中に見いだされる美からも、はっきりと確かめられます (10)。なぜならば、そうした技によって描か

れた身体の中では、美の発生源は素材ではなく、技 [arte] そのもの、そしてそれ以外ではないからです (11)。もし彼らの主張が正しいならば、平均的水準の親方 [mediocre maestro] ならば誰もが、全く同じ尺度と比例を利用し、同じ大理石の塊を素材に用いることによって、トリポロの像と同じものを制作することができるはずですが、いやむしろ、まったく同じ大きさの同じ素材によって作られたあらゆる像が、同じように [a un modo] 美しくなるはずですが、もしそのようなことがあるならば、貴殿閣下は、そこらにいる誰かにインクを使わせるだけで、タッソ氏に知らせることなく、彼と同じものを書かせることができるということになりかねません。したがってわれわれは、われわれが今グラツィアと呼んでいるこの美が生じる源は、身体でも素材でもなく——それらの本性はこの上なく醜いからです——、フォルマ [形相：forma] からであると断言しなければなりません。フォルマの中にはあらゆる完全性 [perfezioni] が見いだされるのであり、フォルマはそれらすべてを素材と身体に与えます (12)。自然のものかそれとも技によるものかを問わず、低い世界 [地上のこと] の身体における美は、いうなれば、このグラツィアおよび悦ばしさ [piacenza] にほかなりません。それぞれ固有のフォルマを有するそれらの身体それぞれが、本質的にか、それとも偶然にかを問わず、このグラツィアと悦ばしさを有します。本性によって形成される事物の場合は本性におけるグラツィアと悦ばしさを有し、技によって形成される事物は技におけるグラツィアと悦ばしさを有します。人間の場合、人間固有のフォルマは靈魂 [anima] であり、われわれがここでグラツィアと呼んでいる美すべては靈魂から生じます。プラトンによれば、このグラツィアは、原初の善と至高の善性が発する光線と輝き [raggio e splendore] にほかならず、世界中のあらゆる部分に浸透し、そこで輝きを続けます。『天について』の第一書においてアリストテレスが語った神のごときあの一節もまた、このプラトンの意見から遠く離れてはおりません (13)。ダンテは『天国』の冒頭で、その一節を引用し、解釈を加えてこう唱っています。

あの方の栄光はすべてを動かし  
宇宙を貫き、輝き続ける  
大小を問わず、見いだしうるあらゆる場所で。(14)

しかし、愛の秘儀は神聖であると同じくらい無限であるため、それについてどれほど語ろうとも、語り残した事柄が増え、また大きくなっていくように思われます。しかし、この議論をとにもかくにも終え、新しい難問に話を進めないためには、次のことについて説明する必要があります。いったいなぜ、ひとりの女が、この上なくグラツィア [graziosissima] であるにもかかわらず、あらゆる男に対して同じようにグラツィアに映ることはなく、誰しもを等しく感動させ悦ばすこともなく、それどころか、同じ一人の男に対してなのにそのつど異なるように映るということが頻繁に起こるのか。またその逆に、いったいなぜ数多くの女が、あまりグラツィアではないにもかかわらず、驚くほど多くの男を誘惑し、心を奪うのでしょうか。そしてまた、第一の疑問の解決に関して生じる一見したところの矛盾、明らかな誤謬に見えかねない問題についても説明したいと思います。わたしのまちがいであれば、のちに挙げるアリストテレスの説明の真意は、まさしくこの問題に

ついて明確に述べるためのものです。さて、この矛盾というのは、先に述べたように、美はグラツィアなしにありえるが、グラツィアは美なしにありえるということであり、これは一見したところではまちがいに見えるし、ありえないように見えます。なぜならば、美はある種のグラツィアなので、そのいずれもがそれのみで、それぞれを理解する人間の心を動かし悦ばすように思われるのに対して、グラツィアがあるところには常に美もあり、その逆もあるように思われるかもしれないからです。これに関しては、美は二つの様態 [in due modi] に区別されることを知らなければなりません。アリストテレスおよび彼以外の幾人かによれば、ひとつは身体の各部位の比例の中に生起する美であり、これは身体的美 [bellezza corporale] と呼ばれ、また実際にそうしたものです。俗人および庶民はこの美のみを知っており、結果として彼らはこれのみを愛します。これは、ご存じのように、五感すべてを通じて享受されます。この美のみを主として愛する人々は、野獣とあまり変わらない、あるいはまったく変わりません。もうひとつの美は、靈魂が有する美德と特性 [virtù e costumi dell'anima] の中に生起するのであり、われわれが論じているグラツィアもやはり靈魂から生じます。こちらは精氣的美 [bellezza spirita(sic)le] と呼ばれています。善なる人間たちによって認識され、その結果として愛され、また善なる人間たちによってのみ瞑想される美です。しかし、偉大なプラトン主義者プロティノスは、この美のことを意図しながら、美しくない事物は醜いと述べています (15)。この美は、心性 [mente] 以外の何かによっては、つまり眼や耳では理解しえないものであり、したがって思考 [pensiero] 以外の何か、つまり視覚や聴覚によって享受することはできません。これについては、これまで繰り返し何度も、多くの場所で、この上なく流暢に [leggiadramente] 証明されています。たとえばわれわれの仲間であるプラトン主義者フランチェスコ [・ペトラルカ] 氏や (16)、彼以外にもさまざまな古今のトスカーナ人がそれを証明しており、さらには他の誰よりも博識で畏敬すべきあのピエトロ・ベンボ氏が、この上なく甘美で流暢な散文においても神のごとき [divini] ソネットにおいてやはり同じように、このことを証明しています (17)。要するに、グラツィアはベレッツァなしにもありえると述べるのは、わたしがグラツィアをプラトンに由来する精氣的美として理解しているからであり、換言すれば、グラツィアこそが真の美であり、それらは互いに他がなければありえないからです。このようにして理解されたグラツィアが、偽の身体的美よりも優れていることには疑問の余地がありません。

あらゆる疑問が生まれかねないこの部分の論旨についてさらに明確にしておくため、わたしはこう述べたいと思います。グラツィア、換言すれば靈魂の [真の] 美 [la bellezza dell'anima] は、それほど完全な比例を与えられてはいない身体、つまり俗にいわゆる美しくない身体には存在しませんが、あらゆる比例をまったくもたない完全に崩れた身体にはありえません。換言すれば、靈魂のグラツィア、つまりわれわれが真の美と呼んでいるものが、多くの場合、身体の比例と尺度に結合するのはたしかなのです。事実、ペトラルカは、彼の愛するマドンナ・ラウラをこの上ない高みへと称揚するために、こう述べています。

二つの巨大な敵同士、美と誠実が

結合を果たし (ペトラルカ『カンツォニエーレ』CCXCVII)

それに続いてさまざまなことが起こったと歌われます。そして、すべての神学者およびラテン語詩人の師 [ウェルギリウス] が、その『アエネイス』第五歌で表徴を伝えようとしたのもまた、このことにほかなりません。彼はエウリアルスの物語を歌いながらこう語っています。

そして美德、それはベッコな身体の中では  
いっそうありがたいものとなるのが常である、等々 (ウェルギリウス『アエネイス』V, 343)

もし、美の定義においてわたしが「グラツィア」とのみ述べなかったのはなぜか [そしてその代わりに「ある種のグラツィアと述べたのはなぜか」と問われるならば、わたしは「グラツィアとはいかなるものとして理解されるべきかを、より明確に説明するためです」と答えましょう。すなわちそれ [ある種のグラツィアとしてのペレッツァ] は、誰かを悦ばせ、その心を動かして愛させる何かであり、なぜならばわれわれは、たとえば「あれを読むのはグラツィアである」、「あれを書くのはグラツィアである」と述べる場合のように、悦びを与えはするが、心を動かして愛させることはない他の多くの特性をもグラツィアと呼ぶからです。われわれは常日頃、あのせむしの香水職人チアーノ [Ciano] にはあらゆる点でグラツィアもなければ上品 [garbo] でもないと語りますが、それを否定する人がいるでしょうか。

今まで気づけなかったのですが、わたしが思ったよりも夜も更け、書くことに疲れ果ててしまいましたので、次のことはもっと時間をかけて後日、説明しようと思います。つまり、フォルマと靈魂の真の美についてさらに深く論じる場合、靈魂を有するすべての事物が美しくないのか、いやむしろ、美しいと呼ばれないのかという問題についてです。また同様に、なぜ多くの人間が美を認識せず、その結果として美を愛することがないのか、そしてなぜ認識されない美を愛することが出来ないのか、という問題もあります。しかしここではとりあえず、貴殿閣下に対して、わたしが判断しうるもっとも適切な方法で、次のことを語りました。第一に、美はグラツィアのないところにも発見しうるというのは、あらゆる嘘や欺瞞から逃れているかのようにして述べられるにもかかわらず、俗人たちのまちがった意見です。次に述べましたのは、賢者たちが語る真説、すなわち、美とグラツィアは同じ一つのものであり、互いに分離されえず、それゆえどちらか一方を望む者はもう一方をも等しく望んでいることになるという見解です。貴殿閣下の手紙にこめられた真情を正しく理解できたとすれば、これらのことこそが、貴殿閣下がまずなによりも知りたがっていらっしゃるように思われました。長く書きすぎたか、それとも短すぎたかわからないため、いずれの場合でもお許しくださいなればさいわいです。貴殿閣下にご挨拶申し上げますとともに、ルカ殿、さらにカルロ氏ら他のすべての方々にもよろしくお伝えください。

## 付記

この訳と註釈は、わたしが申請代表者となっている科学研究費補助金 (挑戦的萌芽研究、平成19年度~21年度) 「修辞学、詩学、俗語文学におけるマニエリスムの造形原理の実証的・文献学的研究」の成果報告のひとつをなして

いる。これまでの研究を支援して頂いた文部科学省、学術振興会、採択の審査をしていただいた諸先生、研究代表者の研究を暖かく見守ってくれている美術史学会、美学会、地中海学会の皆様へ感謝いたします。また弘前大学人文学部総務グループには、研究上の経理事務について多大なお手数をおかけした。記して感謝いたします。

1 Benedetto Varchi, *Libro della beltà e grazia*, in Paola Barocchi (a cura di), *Trattati d'arte del Cinquecento fra Manierismo e Controriforma*, vol.1, Gius. Laterza & Figli, Bari, 1960, pp.81-91. 以下の註釈は、ここに挙げたパロッキ版（唯一の近代的註釈版本）に基づきながら制作した。パロッキは、ヴァルキが典拠としたと考えられるジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ、レオーネ・エブレオ、アニョロ・フィレンツォーラ、そしてカスティリオーネのテキストを多く引用しているが、それらのテキストそのものが解釈の必要性を持つ重要なものであり、別個に総合的検討をおこなうことを期しつつ（そのほとんどが日本語版で読みうるという幸せな状況に感謝しつつ）、ここでは多くを省くことにした。なお、参考文献指示を繰り返す不要の手間を避けるため、パロッキに基づく註釈については、各項の最後に記した。

2 レオーネ・オルシーノ（あるいはオルシーニ：1512-1564年）は、フレーション（Fréjus）の大司教であり、同時に詩人としても知られていた。パドヴァの「インフィアンマーティ（焼かれた者たち）のアカデミア」の創立者であり、初代代表を兼任した。ヴァルキは1540年、このアカデミアにおいて、愛をめぐるいくつかの講義を行ったことが知られている（Barocchi, *ed.cit.*, p.386, nota 1）。

3 ヴァルキは、『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でこう述べている。「同じくプラトンが述べているように、靈魂の美 [bello] を生成しようと望む人々は、他よりももっと完全な事物、ということは当然ながら他よりも優れた生得の本質をもつ事物を愛し [amano]、他のなによりもまず、[身体的な] 美しい事物 [le belle] を愛さなければならない。しかし、その方法 [maniera] については注意すべき点があり、そのなんらかの事物が身体の美的部分ではなく靈魂の美的部分であるという場合がともしばしば生じるが、そうした場合、愛する人々によって愛されるべきは、上で述べたのとは逆に、身体の美的部分ではなく、靈魂の美的部分でなければならない。第二の愛は、身体的美の中で身体の美的部分を生みだそうとする愛であり、心性 [mente] ではなく身体によって生を授けられた人々に属する愛であり、彼らは肉の快樂に支配される。それゆえ、このような愛は俗なる愛 [volgare] と呼ばれるべきである。さらに同じくプラトンが述べているように、それらの人々は、完全な事物よりも不完全な事物を愛し、それゆえ靈魂よりも身体を愛し、思慮深い賢者よりも愚者を愛する。彼らとは相対する人々は、身体よりも靈魂を、愚者よりも思慮深い賢者を愛するのである」（Barocchi, *ed.cit.*, p.386, nota 2）。

4 カトゥルス（LXXXVI）。これに続く部分の試訳は以下。

わたしもこれらのことについては認めるにやぶさかではない。

しかしわたしは彼女が優れた形姿をしている [formosa] とは思わない、

なぜなら彼女はウエヌスタス [女神ウエヌスの美：venustas] をもたないからであり、

背の高い彼女の全身の中には、[神のごとき美の] 一粒の塩がどこにもない。

レスビアは美しい、なぜなら彼女はあらゆる美点 [pulcerrima] をもつからであり、

彼女は、あらゆる女性たちからあらゆるウエネレ [ウエヌスタスの複数形：Venere] を盗みだした。

haec ego sic singula confiteor.

totum illud formosa nego. nam nulla uenustas

nulla in tam magno est corpore mica salis.

Lesbia formosa est quae cum pulcerrima tota est,

tum omnibus una omnes surripuit Veneres.

ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ『ジョヴァンニ・ペーニヴィエーニの愛のカンツォーネへの註釈』における翻訳は以下。

Quintia à molti par bella, agli occhi miei

Candida, longa, retta, in se e as(sic)cuna.

Parte di quest' esser conf(sic)jessi in lei.

Ma niego ben chel tutto accolto in una.

Forma, bel sia, che'n si gran corpo un falso

Fior non risplende pur di grati' alcuna.

(*Commento dello Illustrissimo Signor Conte Ioanni Pico Mirandolano sopra una Canzone de Amore, composta da Girolamo Benivieni...*, Libro Terzo, Capitolo. X, Stanza sexta, in Giovanni Pico della Mirandola, *Opera omnia (1557-1573)*, Tomus I, Con una introduzione di Cesare Vasoli, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, Hildesheim, 1969, p.918)

5 ヴァルキはジョヴァンニ・ピコのなんらかのテクストを参照していたようである。『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でヴァルキはこう書いている。「フィチーノ以後に愛について論じたのがジョヴァンニ・ピコ伯爵であり、彼は不死鳥 [Fenice] というそれなりにふさわしい渾名で呼ばれ、まるでその渾名以外にはないかのように広く知られ、ピコではなくフェニーチェと繰り返し呼ばれたほどである。彼は愛について、ジローラモ・ベニヴィエーニによる愛をめぐるカンツォーネへの註釈において、フィレンツェ語で論じており、これは実に秩序的に述べられ、また実に博識な論考であり、彼が単なる博識な哲学者というよりも神学者と呼ばれてしかるべきことを示した」(Barocchi, *ed.cit.*, p.386, nota 4)。

6 『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でヴァルキはこう述べている。「身体之美は真の美ではなく、真の美の模像 [simulacri] であり似像 [sembianze] であり、[真の] 美の影と呼ばれるべきである」(Barocchi, *ed.cit.*, p.387, nota 4)。パロッキが引いているように、レオーネ・エブレオ『愛の対話』でも同様の議論が述べられている。

7 『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でヴァルキはこう述べている。「わたしが考えるのは、[グラツィアは] 素材における特性でもなければ、俗語におけるいわゆるおおざっぱ [grossa pasta] な何かでもない。それがどれほどの規模で、どのようなもので、どうしてそのようなものであるのかは分からないが、いずれにせよそれは、花や光のようなものであり、グラツィアと呼ばれる。それはトスカーナ語における美 [bellezza]、愛を息子にもつ母であり、それゆえ美は、総じてすべての人によって、とくに神のグラツィアに恵まれるかあるいは自分の美德を通じて美を他人よりも熟知し、その結果として他人よりも美を完全に開花させる [fruiscono] ことが出来る人々によって、愛され称賛されるべきであり、そればかりか、鑑賞され [ammirata]、崇拜される [onorata] べきであると考えられる」(Barocchi, *ed.cit.*, p.387, nota 4)。

8 『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でヴァルキはこう述べている。「親愛この上ない聴衆たちよ。もしここに、偶然かあるいは勤勉の結果により、真の美を持つ事物を見いだした人、あるいはそのような美をもつと彼によって判断された何かを見いだした人がいるとしよう。その彼が、その直後にいっさい感動することなく、それゆえ覚醒することもなく、それどころか驚くべき事にもその何かを愛することもなく、崇拜もせず、結局それを欲望することもないなどということがあるだろうか。その事物は、美 [bellezza] をもっている。それは神の光善性から発せられる輝きの光線にほかならず、あらゆる事物に強く照射される。それゆえ、眼に悦ばしくないものはいっさいなく、またその美なしには魂を悦ばせることができない。美以外のあらゆる事物は、時間がたつて経過していく中で飽きられたり、嫌われたりする。しかし、美、美のみは、他のどんな事物とも異なり、うんざりされることもないし、いかなる不快感を与えることもない。それどころか美は、所有すればするほど、鑑賞すればするほど、ますます成長し、常時所有することができるようになり、もっとよく鑑賞したいという欲望を増加させるのである」(Barocchi, *ed.cit.*, pp.387-8, nota 6)

9 アリストテレス『トピカ』(116b) ; 『ニコマコス倫理学』(1123b)。『修辞学』での関連箇所は発見できなかった。

10 『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でヴァルキはこう述べている。「ここで、本性によって形成される事物から、技によって形成される事物が区別されることになる。なぜならば、本性によって形成される事物は、常に、自らの内部に原因を持つが、技によって形成される事物は、それを外部に持つ、つまり技の内部に原因を持つからである」(Barocchi, *ed.cit.*, p.390, nota 2)。

11 トリボロ自身によるヴァルキへの手紙を参照せよ。Barocchi (a cura di), *Trattati d'arte...*, cit., pp.78-79.

12 『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でヴァルキはこう述べている。「存在するすべての事物は、それぞれのフォルマによって媒介されて [存在して] いる。なぜならば、あの哲学者 [プラトンのこと] が述べるように、フォルマとは、事物を存在せしめるものだからである。それぞれの事物のフォルマはそれぞれひとつずつしかなく、それゆえ、ひとつの事物は、それぞれのフォルマを媒介にしてひとつずつ存在する」(Barocchi, *ed.cit.*, p.392, nota 7)。

13 ダンテ『神曲』の「天国編」第一歌をめぐる講義において、ヴァルキはこう述べている。「ダンテのこの上なく巨大な技と豊潤性について、そして哲学者および雄弁家と真の詩人とのあいだの相違点がいかなるものであるかを知りたいならば、アリストテレスの『天について』の第一書を何百回も繰り返し読むべきである。ダンテもそれを読んでいたのはまちがいない。そこでは、いかなる効果も装飾もない単純な言葉によって、哲学者の流儀で「永遠からすべての事物に存在と生命が与えられ、ある事物にはより明るさが、ある事物にはより暗さが与えられた」と述べられている。それが、ここ [ダンテでは] 詩人の流儀で歌われているのである。そこで彼は多くの装飾を用いたが、それぞれすべてが、それぞれに対応するムーサたちから遠く離れていない [古典の源泉があるという意味だと思われる] ことが確かめられるのである」(Barocchi, *ed.cit.*, pp.392-3, nota 10)。

14 ダンテ『神曲』、「天国」第一歌、1-3行。

15 プロティノス『エンネアデス』(I 6, 2)。Cf. Plotino, *Enneadi*, testo greco a fronte, a cura di Giuseppe Faggini,



Bompiani, Milano, 2000, pp.128-131.

16 ペトルルカからの引用がのちになされる。

17 『愛の諸問題についての四講義』の第一講義でヴァルキはこう述べている。「フランチェスコ・カッターニ・ディアツチエート [1466-1522] の『頌歌集 (*Panegerico*)』と [なおヴァルキはディアツチエートの詩集を編集している。*I tre libri d'amore di m. Francesco Cattani da Diacceto. Con un Panegirico all'amore*, a cura di Benedetto Varchi, Vinegia, Giolito de' Ferrari, 1561] 同じ頃、あるいはそれに少し遅れて、ピエトロ・ベンボ氏がアゾロの人々 [*I Asolani*] をめぐる3書を構成した。そこで述べられた教義は、いうまでもなく少なからぬものであり、多くの人にとって有益なものだが、その教義にふさわしい雄弁に調和していたため、わたしとしては、[ベンボのこの作品において] トスカーナ語は自らのプラトンを手に入れたと述べるにためらいを感じることがないのである」(Barocchi, *ed.cit.*, p.394, nota 3)。